

令和八年度

第五十五回

さくらんぼの都市さがえ全国俳句大会

第四十六回

さくらんぼの都市さがえ

全国小・中学生俳句大会

# 入選句集

令和八年六月二十八日 寒河江市文化センター

主催 さくらんぼの都市さがえ全国俳句大会実行委員会

共催 寒河江市立図書館

後援 寒河江市・寒河江市教育委員会

寒河江四季のまつり実行委員会



# 入選句集

第五十五回 さくらんぼの都市まちさがえ全国俳句大会

第四十六回 さくらんぼの都市まちさがえ全国小・中学生俳句大会

選者

武	佐	阿	松	加	武	岸	
田	々	部	田	藤	田	本	
菜	龍	栄	弘		詩	尚	
美	雄	子	三	仁	子	毅	
先生	先生	先生	先生	先生	先生	先生	



## 「さくらんぼの里さがえ」の俳句

実行委員長 武田 詩子

六月に入ると、さくらんぼの畑地は大賑わいになります。大型観光バスが行きかい、街道には販売所が連なり、店先にはもぎたての艶やかなさくらんぼが並びます。

さて、「第五十五回さくらんぼの都市さがえ全国俳句大会」兼「第四十六回さくらんぼの都市さがえ全国小・中学生俳句大会」を迎えるにあたり、全国から多くの応募作品がありましたこと、大変嬉しく心からお礼を申し上げます。

中でも県外からの応募句が多くなり、またアメリカからの応募もあり、この大会が広く熟知されたものと思われまます。

三十六年前の「さくらんぼまつり第二十回全国俳句大会」では応募数九〇〇句、「季節」編集長長谷 岳氏の講演がありました。後援には市・県・メディア三社など多くの文化団体の名前が列記されております。

このように「さくらんぼ俳句大会」は名称や事務局を変えながら五十五年の長い年月を経てまいりました。これまで俳句界の名だたる俳人の方々をお迎えし、ご講演と中央選者としてこの大会を応援していただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

俳句は身近な一行詩、自分史とも言われております。また次年度も珠玉の御句をご応募し、てくださることを願いながらご挨拶に代えさせていただきます。

寒河江市長賞

特選

桜桃挽ぐ男にもある上機嫌

山形県東根市

伊藤

幸

寒河江四季のまつり実行委員会長賞

特選

受粉樹といふ脇役のさくらんぼ

山形県新庄市

岸

啓二

秀逸

寒河江川水面を削る雪解風

山形県西川町

清野 幸夫

木の芽張る少し華やぐ過疎の村

山形県河北町

竹屋 峯子

秀逸

顔上げるたびに霊峰芹洗ふ

山形県山形市

金谷 ゆかり

新緑へ父母待つ里へ発車ベル

千葉県香取市

清水 和子

岸本尚毅賞

特選

子宝の湯のご神体山青葉

東京都武蔵野市 乙訓りん

秀逸

母米寿子は還暦の五月来る

山形県上山市 木村比紗子

ふらここや互ひ違ひに弧を描き

栃木県宇都宮市 斎藤光

こつちりと固き帽子の一年生

東京都文京区 小西弘子

選評

岸本尚毅

特選 子宝の湯のご神体山青葉

乙訓りん

「子宝の湯のご神体」とは「金精様」か。男根を象ったご神体を想像する。このような卑俗な事柄は面白く可笑しく詠むことも出来るがこの句はそういう詠み方をしなかった。「山若葉」とあるので、温泉があるような山の中の情景句として鑑賞したい。よすぎるに情景をマッシュに詠んだ句なのである。

そのうえで、読者のお好み次第で、仄かなユーモアや官能を汲み取ってもよい。神秘的です。し恥かしい「ご神体」を隠すかのように、山は「若葉」を茂らせたのだ。

「若葉」という季語の持つ生き生きとした感じもまた、この句に精彩を与えている。

秀逸 母米寿子は還暦の五月来る

木村比紗子

誕生日が来ると母は米寿になり、子は還暦になる。そんな五月がもうすぐやって来る。あるいは、やって来たというのである。

母と子は偶々誕生日が同じ五月だったのだ。その「偶然」をそのまま句にした。「米寿」「還暦」「五月」の組み合わせを違ったものに取り替えれば、たとえば「十月が来る母は喜寿子は知命」だとか「母は百穂子は不惑なり九月来る」だとか、それでも一応は俳句に喜ぶ。こういうタミーの句と「母米寿子は還暦の五月来る」とを見比べるとどうだろうか。直観的ながら「米寿」「還暦」「五月」の組み合わせがもっとも印象的であるように思われる。

秀逸 ふらここや互ひ違ひに弧を描き

斎藤光

「ふらここや」に切字の「や」が用いられていて句形が美しい。「や」の切れ目があるものの、意味のうえで中七下五がプランコの描写であり、いわゆる「一物仕立ての句である。二つ並んだプランコに子どもが乗って、それぞれ弧を描いて漕いでいるのだが、一方が後方に退いたとき、もう一方は前方にある。そんな様子をそのまま「互ひ違ひに弧を描き」と詠んだ。

プランコとはそもそもこういうものであり、物の見方に新奇さはないものの、プランコの動きを過不足なく、要領よく句にした手際を評価して遊ぶための鞞轡という遊具であって春情を伴った季語だが、現代では公園のプランコなどを詠んだ作例が多い。

秀逸 こつちりと固き帽子の一年生

小西弘子

「年生」とあるので「入学」という季語を詠んだ句と解した。「こつちりと」は、まだ頭になじまない新しい学帽の硬い感触をそう詠んだのだらう。制帽をかぶった新入生の緊張した面持ちが想像される。「年生」という言葉で「入学」の句だといってよいのかという問題があるが、虚子の「風が吹く仏来給ふけはひあり」を「迎火」の例句として扱っているケースもある。

「青空文庫」で「こつちり」の用例を検索したところ、小林多喜二の「不在地主」という小説に「頭をひいて、身体をコッちりさせている」という用例が見つかった。このような用例が見つかった、選者としては安心してこの句を採ることができると。

近詠 噴水の棒のごとくに単純に

# 武田詩子選

## 特選

宿題の花丸おまけさくらんぼ

山形県村山市 原田厚子

## 秀逸

さくらんぼエコー写真に欠伸の子

茨城県水戸市 久信田史夫

師弟像の涼し間合ひや立石寺

愛知県豊田市 城山悠水

さくらんぼ摘む葉と空をかきわけて

千葉県市川市 一言遊子

## 選評

武田詩子

特選 宿題の花丸おまけさくらんぼ

原田厚子

作者は小学校か塾の先生でもあろうか。子どもたちの宿題に赤ペンで花丸を付けているが、思わずクスッと笑う回答もある。100点はさくらんぼの形に似ている。思わず葉と葉っぱを足してさくらんぼにしてみた。ユーモアのある先生で子どもは喜んだことだろう。明るく元気な句となっている。

秀逸 さくらんぼエコー写真に欠伸の子

久信田史夫

お腹のエコー写真を撮った。そろそろ臨月に近いので胎児の姿もはっきりと映っている。「ほら欠伸をしているよ」と医師から言われその場で笑い声がおきた。家庭に戻ってから、その写真を見ながら早く子ども誕生を待ちわびている姿が伺える。

秀逸 師弟像の涼し間合ひや立石寺

城山悠水

山寺立石寺の芭蕉と曾良の石像を丁寧な写生で表現された。登山口を登ってすぐの根本中堂と山門の間の木立の中に二人の像がある。眼下には山寺の街並みが見え、一陣の風が過ぎてゆく。作者はそこに「涼し間合ひ」と美しい言葉で詠んだ。

秀逸 さくらんぼ摘む葉と空をかきわけて

一言遊子

当地ではさくらんぼは「挽ぐ」と言う。作者はより丁寧に「摘む」と表現した。脚立や梯子に登って葉を掻き分け、ひと粒つつ丁寧に挽ぐ。作者は空をも掻き分けると大胆に表現した。色彩豊かな風土への讃歌となっている。

近詠 単線の小旅や桜桃あうた十顆持ち

佳作

木の芽張る少し華やぐ過疎の村

山形県河北町 竹屋 峯子

あいさつはまず桜桃の生り具合

山形県寒河江市 萩原 さち子

雨情碑や雨にあかるき桃の花

埼玉県春日部市 飯島 準子

白鳥の目覚め百花の光りだす

群馬県藤岡市 木下 久子

行く春や凹んで積もる砂時計

熊本県熊本市 松本 オハナ

顔上げるたびに霊峰芹洗ふ

山形県山形市 金谷 ゆかり

寒河江川水面を削る雪解風

山形県西川町 清野 幸夫

百歳へ鋏振るかひな養花天

長野県松本市 中村 百仙

吾子よりも妻もつと好きさくらんぼ

大阪府東大阪市 森 教安

食い初めの椀に一粒さくらんぼ

東京都世田谷区 後藤 周平

入選

つばめの子七人乗りの乳母車

熊本県熊本市 岩下 律子

アマリリス母となる娘の眼の強し

神奈川県座間市 土屋 良夫

新緑へ父母待つ里へ発車ベル

千葉県香取市 清水 和子

一歳と百歳のゐる日向ぼこ

栃木県宇都宮市 斎藤 光

さくらんぼ種飛ばすだけの反抗期

東京都立川市 松崎 久代

来し方を辿れば傍にさくらんぼ

山形県河北町 鈴木 のぶ子

百歳の一步一步を青き踏む

富山県滑川市 折田 祐美子

翳す手に月山宿すさくらんぼ

愛媛県松山市 白石 健治

逍遥の春泥の靴芝に拭く

神奈川県横須賀市 阿部 文彦

はまなすを過ぎれば蒼きオホーツク

佐賀県唐津市 古賀 由美子

加藤 仁 選

特 選

さくらんぼ噛む吾子の齒のあたらしき

東京都板橋区 灰 島 りんこ

秀 逸

ふつ飛んで歩く幼子さくらんぼ

山形県東根市 植 松 保 信

桜桃挽ぐ男にもある上機嫌

山形県東根市 伊 藤 幸

口元に桜桃を置き棺閉づ

東京都世田谷区 後 藤 周 平

選 評

加 藤 仁

特選 さくらんぼ噛む吾子の齒のあたらしき

灰 島 りんこ

昨日一本の歯と想っていたら今日はまた一本ある。それを発見した時の親の喜びが「あたらしき」から伝わってきます。吾子を抱いてさくらんぼのような目、さくらんぼのような赤い頬、吾子から伝わってくる温もり、成長には言い尽くせぬ喜びがあると思います。若いお母さんは、日々しっかりと観察し、その成長ぶりを育児日記に書き、喜び、家族にも祝福されていることまでも想像されます。

秀逸 ふつ飛んで歩く幼子さくらんぼ

植 松 保 信

さくらんぼ挽ぎを手伝っているのでしょうか。木の下で遊んでいる幼子の声をかけ、「ふつ飛んで走る」ではなく「ふつ飛んで歩く」を見たのです。幼い子に最適の言葉です。幼子を見ているの言葉の発見がこの句の命となっています。今にも転びそうで転ばずに歩く、可愛いですね。写真や絵にしたような景です。幼子には「さくらんぼ」が似合います。

秀逸 桜桃挽ぐ男にもある上機嫌

伊 藤 幸

「男の上機嫌」とは面白い表現です。桜桃の収穫期間は短いので、何人かを雇います。脚立へのほり豊かに熟した桜桃を挽ぎます。ラジオの懐メロでも聞きながら桜桃を挽いでいるのでしょうか。主でしようか、時おり鼻歌であったり声を出してみたりが聞こえてきます。この作者も桜桃の文字を使われていますので年齢が知れます。

秀逸 口元に桜桃を置き棺閉づ

後 藤 周 平

桜桃の畑を継ぎ育ててこられた方が亡くなったのでしようか。今の人は「サクランボ」と言い、昔は「おうとこ」が常識でした。「桜桃」と表現されていますので亡くなった方への思いやりか、作者も高齢者なのか、それにも棺に花を添えるのは山形の習わし。それに死者の口元に桜桃を添えてくれた、悲しいけれど暖かい心が嬉しいです。

近詠 月山水の代田へ姿見月の山

佳作

新緑へ父母待つ里へ発車ベル

千葉県香取市 清水和子

一歳と百歳のゐる日向ぼこ

栃木県宇都宮市 斎藤光

手話の手のおとぎ話の雪の夜

東京都江戸川区 羽住博之

癌三つ癒えし義母ははよりさくらんぼ

東京都立川市 松崎久代

子に送り祖父母に供ふさくらんぼ

山形県山形市 浅野友美

さくらんぼ鳴りだしさうに出羽の風

愛媛県松山市 白石健治

縄電車車掌の口のさくらんぼ

神奈川県鎌倉市 嶋村比呂樹

さくらんぼ受話器片手に一礼す

山形県村山市 布川百合香

特攻の遺影は二十歳夏座敷

新潟県長岡市 福嶋隆男

受粉樹といふ脇役のさくらんぼ

山形県新庄市 岸啓二

入選

朝晩に羽織る一枚芒種かな

山形県西川町 奥山みよし

介護する人は聞き役さくらんぼ

山形県河北町 奥山弘子

つばめの子七人乗りの乳母車

熊本県熊本市 岩下律子

口癖も寝癖も愛しさくらんぼ

大阪府枚方市 堀尾聡子

こつちりと固き帽子の一年生

東京都文京区 小西弘子

敬礼の園児は署長さくらんぼ

熊本県熊本市 榎木俊彦

長考の扇閉ぢたり開いたり

山口県田布施町 曾我欣行

師弟像の涼し間合ひや立石寺

愛知県豊田市 城山悠水

一粒に悠久の陽やさくらんぼ

東京都府中市 櫻井光

牡蠣剝かれ初めて波の音を聞く

京都府京都市 岸野由夏里

松田弘三選

特選

どの子にも光のありしきくらんぼ

千葉県香取市 清水和子

秀逸

ふつ飛んで歩く幼子さくらんぼ

山形県東根市 植松保信

つるつるの青空をゆく水馬

千葉県我孫子市 須賀毅

敬礼の園児は署長さくらんぼ

熊本県熊本市 榎木俊彦

選評

松田弘三

特選 どの子にも光のありしきくらんぼ

清水和子

公園などで盛んに遊んでいる子どもたちを見ていると、この句のような事柄を思う人も多いはず。その要因となっているのは「光のありし」である。その光は、子ども達がそれぞれに向かって成長しゆく過程のありようを純粋に想起させるからである。とくに季語の「さくらんぼ」が句の内容にふさわしく生き生きと躍きはじめるのである。

秀逸 ふつ飛んで歩く幼子さくらんぼ

植松保信

この句に注目したのは冒頭の「ふつ飛んで」にある。やや誇張された表現ではあるが半面当を得ている。歩き始めて間もない幼児の軀びそうで軀びない不安定ながら、バランスを保ち、小鳥が飛び立つようなかたちで歩く姿を見かけることがある。良く観察して活写された句である。

秀逸 つるつるの青空をゆく水馬

須賀毅

現在、水馬（あめんぼう）を見られるのはどこであろうか。今ではそういう場所を探すのは容易でないはず。「つるつるの青空」とは小沼が小流れに青空が映っている情景であろう。その水面に浮かんでいる青空の上を、いとまとたやすくすいと歩いているというのだ。「つるつる」の描写が楽しみにげに表白されている。

秀逸 敬礼の園児は署長さくらんぼ

榎木俊彦

入学式や入園式も過ぎ、その時期になるとマスコミの各局が競って交通安全全のキヤラバン隊の出発式の様子を放映している。署長に任命され、やや緊張した園児の表情や式典のようすも伝えられる。敬礼を教えられ、その小ささも可愛らしいもの。微笑ましいワンシーンを捉えた作品。

近詠 涅槃図の裏側覗く空け者

佳作

木の芽張る少し華やぐ過疎の村

山形県河北町 竹屋 峯子

方言を話す幼子さくらんぼ

熊本県熊本市 原田 節子

神楽舞千早の袖に若葉風

山形県山形市 高橋 淳子

鳳輦にひづめの音や夏の雨

東京都中央区 栗原 秀次

一歳と百歳のゐる日向ぼこ

栃木県宇都宮市 斎藤 光

白鳥の目覚め百花の光りだす

群馬県藤岡市 木下 久子

行く春や凹んで積もる砂時計

熊本県熊本市 松本 オハナ

曳く杖に慣れてもとほる桜の実

沖縄県那覇市 稲福 達也

さくらんぼ施設の父の零す笑み

千葉県松戸市 堀 卓

赫奕と摘むや桜桃濃く甘く

宮城県仙台市 片平 奈美

入選

風薫る子は駆ける帆船のごと

大阪府枚方市 堀尾 聡子

揚羽蝶ひかりに濡れておりにけり

神奈川県横浜市 山田 知明

花擬宝珠月山は只悠然と

群馬県藤岡市 稲村 正

子に送り祖父母に供ふさくらんぼ

山形県山形市 浅野 友美

月山の風は柔らかか春田打つ

山形県天童市 五十嵐 恒子

豊満な山羊の乳房や花曇

長野県松本市 中村 百仙

師弟像の涼し間合ひや立石寺

愛知県豊田市 城山 悠水

さくらんぼ褒める仲人晴れの席

埼玉県越谷市 小田 和夫

性格は違えど双子さくらんぼ

千葉県市川市 小田中 準一

さくらんぼ歌詞おぼつかぬ我が校歌

奈良県奈良市 浦城 亮祐

## 小学生の部

奨励賞 寒河江市立寒河江小学校

## 阿部栄子選

### 特選

最上川夕やけてらしてオレンジジュース

寒河江小 四年 土田英茉

クラスがえさくらんぼなるころ仲よしだ

寒河江小 五年 森 ゆめの

こいのぼり空の水槽ゆうゆうと

寒河江中部小 六年 大江 怜楓亜

## 選評

阿部栄子

最上川夕やけてらしてオレンジジュース

土田英茉

夕やけが最上川を照らし、川全体がオレンジ色になりました。まるで大好きなオレンジジュースになったかのようにです。とてもよく観察していますね。

クラスがえさくらんぼなるころ仲よしだ

森 ゆめの

仲の良かった友達とも別々のクラスになり、不安な気持ちで新学期を迎えたわけですが、いつの間にかさくらんぼが実る頃にはたくさん友達ができ、学校生活を楽しく送っているんですね。

こいのぼり空の水槽ゆうゆうと

大江 怜楓亜

青空を大きな水槽にたとえ、こいのぼりがその水槽の中でゆうゆうと泳いでいる様子をとて上手に表現できましたね。

近詠 運動会終へし児の靴くたびれて

秀逸

入選

こどもの日せんたくものもおよいでる

南部小二年 鈴木 湊 大

トラックのさくらんぼたちどこへ行く

西根小四年 齋藤 稜 真

ブランコにのって夕やけけり上げる

群馬県藤岡市立藤岡第一小三年 竹村 悠

ひまわりや空の青さを飲み干して

宮崎県延岡市立旭小五年 畦原 煌 那

佳作

はるのそらみあげてできたさかがり

寒河江小一年 こんの いちか

色とりどり鼻うたまじる春の道

寒河江中部小三年 安達 朔 玖

新しいくつで歩くよ春の道

寒河江中部小四年 佐藤 翔 吾

クローバー探す右手に春が来た

埼玉県坂戸市立勝呂小五年 田中 巧 一

水たまり空をふまずに帰る道

埼玉県さいたま市立島小三年 川本 わこ

ランドセルちいさなせなかゆめのせて

寒河江小一年 たなかりおね

しあわせをみんなにとどけるさくらんぼ

寒河江小二年 鈴木 えな

さくらんぼおいしいパフエによくにあう

寒河江小二年 松田 さき

のりたいたたんぼぼわたげのパラシュート

寒河江小三年 佐藤 せな

さくらんぼふたごにみつご大家ぞく

寒河江小三年 奥山 なのは

さがえ市はどこにいつてもさくらんぼ

寒河江小三年 渡邊 さく

さくらんぼ朝の光にすきとおる

寒河江小四年 谷藤 琉 渚

さくらんぼ農家の願い一粒に

寒河江小六年 武田 侑 奈

ランドセルあけたらはるがはいってた

寒河江中部小一年 吉沢 清 香

さくらんぼわたしもふたごよいつしよだね

寒河江中部小二年 高橋 虹 心

はる風は花をさかせるまほうみたい

寒河江中部小二年 布施 瑛 翔

さがえしのきせつ 楽しむさくらんぼ

寒河江中部小三年 渡 辺 脩 太

おんせんに入ってみんなさくらんぼ

寒河江中部小三年 岩 田 さ き

じいちゃんのさとうにしきはいつとうしょう

寒河江中部小四年 青 柳 朝 陽

きれいだな春風感じて弾くピアノ

寒河江中部小五年 玄 地 希 羽

さくらんぼ今年も熊も食べそうだ

寒河江中部小五年 安 達 梨 詠

たけのこが頭をだして人を待つ

寒河江中部小六年 松 田 六 花

ばあちゃんがあせかきはこづめさくらんぼ

南部小二年 大 山 源 師

おりがみの青は春をよんでいる

南部小三年 久 保 田 蒼 優

セカンドをまもるわたしに春の風

南部小三年 兼 松 あやめ

三年生のつくえ大きくぼくの春

南部小三年 阿 部 陽 太

春の夜のまんげつぼくをはげますよ

南部小四年 布 施 憩 人

シャボン玉私と風とあそんだよ

南部小四年 阿 部 華 奈

悲しみや楽しみのある春の風

南部小五年 土 屋 悠 宗

風ふいて桜の花びらバレリーナ

南部小五年 兼 松 堇

父母が作る努力のさくらんぼ

南部小五年 中 川 貴 裕

青空に声とどくかな運動会

南部小六年 黒 田 桜 来

さくらんぼつくるパパの手やさしい手

西根小一年 岡 部 東 茉

おとうとのほっぺとにてるさくらんぼ

西根小一年 安 達 紗 香

さくらんぼかぜのゆりかごしあわせだ

柴橋小一年 加 藤 律

さくらんぼ空にむかつて手をのばす

柴橋小二年 芳賀慶吾

あせかいてはしるほつぺがさくらんぼ

柴橋小二年 村岡桜季

もがみ川大物つれて五月晴れ

柴橋小三年 渡辺直登

六月はいえのなかがたねだらけ

柴橋小三年 古川涼介

子どもの日空にはボールまぶしいな

柴橋小三年 奥山湊斗

春風がせなかをおして動きだす

柴橋小四年 石井希歩

夕ぐれにひびくピアノとツバメの声

柴橋小六年 柏倉咲那

雨風にまけずに実るさくらんぼ

白岩小五年 鈴木陽

はじめてのしゅくだいはなまるうれしいな

醍醐小一年 おおいずみゆうか

はつほりのたけのこそなえ手を合わす

醍醐小三年 鈴木紅陽

さくらんぼみつばちるすばん早く来て

醍醐小四年 大泉こゆき

つくしんぼきょうそうするよせいくらべ

三泉小一年 たかはしまこと

いちりん車きれいな花とれんしゅうだ

三泉小三年 角川えま

春風に夢をのせたよホームラン

三泉小五年 日下部雅

さくらんぼ空の青さをつれてくる

三泉小六年 吉野暖

さくらんぼいっぱいあるなゆめだった

東京都葛飾区立清和小三年 しみずまや

ゆめで見たおさらいっぱいさくらんぼ

東京都葛飾区立清和小三年 高荷悠楓

夏の川一番乗りのお父さん

愛媛県愛媛大学附属小三年 若狭早

さくらんぼほめたらたれて赤くなる

埼玉県坂戸市立勝呂小四年 田中桜彩

鞆や空はかがやき顔に風

ワシントン日本語学校五年 田中智久



秀逸

田水張る水面に映える祖父母の手

陵東中三年 安藤磨美

春の宵江風と住く臥竜橋

陵西中三年 真木悠

愛用の水筒に住むサイヤ人

ワシントン日本語学校二年 ロビンソン 慧

オアフ島警報響く冬の朝

福岡県春日市立春日中三年 大久保道

佳作

豆まきやあわてふためく鬼の声

陵東中二年 古城慎一

空高く泡沫に帰すしゃぼん玉

陵南中二年 仁藤李彩

炎天に白球追う声途切れなく

陵西中三年 早坂湊

さくらんぼみんなの心を赤くする

鹿児島県長島町立鷹巣中三年 小田陽菜

ぜんまいに怠けた分の丸さかな

愛知県名古屋中二年 加藤俊行

入選

ふうりんの音で目覚める昼下り

陵東中一年 土田蒼空

月明かり一人歩けばかげ二つ

陵東中一年 菅井蘭桜

人間の目と鼻おそう花粉症

陵東中一年 後藤真弘

春風にノートのページめくれだす

陵東中一年 渡部優愛

炎暑で中こもる熱柔道着

陵東中二年 菖蒲千暁

前髪を少し短く夏の恋

陵東中二年 船田杏薫

慈恩寺や杉の木立に春の声

陵東中二年 佐藤伶香

若葉風打球に乗せたる僕の夢

陵東中二年 日下部駿

教科書の余白に伸びる春の影

陵東中二年 青山瑛士

新米でおにぎりやっぱ塩一番

陵東中三年 高橋環太

桜桃の香を追い風にペダルこぐ

陵東中三年 丹野 結 栳

今日こそはあなたのとより文化祭

陵東中三年 木村 璃 南

青春をさくら並木がつつみこむ

陵東中三年 布川 世 絆

春の風タスキリレーの背中押し

陵東中三年 松田 陽 太

新米の少しかためがすごく好き

陵南中一年 渡邊 宗 太朗

風かおる全力出しきる応援団

陵南中一年 渡邊 凜 乃

寒の入り上着一枚いや二枚

陵南中一年 紺野 亜 優菜

ストーブはみんな集めるヒーローだ

陵南中一年 小野 悠 晴

窓明かり消えていよいよ星月夜

陵南中二年 工藤 一 楓

朧月儚し悔ゆむ夜もすがら

陵南中二年 酒井原 光 里

真っ白なノートが光り新学期

陵南中二年 佐藤 暖

薫風に記憶の栞奪われる

陵南中二年 笠原 一 夏

谷深く岩魚求めて針落とす

陵南中三年 渡辺 龍

月山に残る雪こそ山の神

陵南中三年 安藤 光

母の日に家族でたくらむサプライズ

陵南中三年 武田 莉 果

桜散りまた烏兔匆匆と迫る四季

陵南中三年 伊藤 千 咲

春風や小気味よきかな自転車ぐん

陵西中一年 設楽 柊 稀

花筏空を映して流れゆく

陵西中一年 廣林 莉 玖斗

桜桃が輝き放ち夢のよう

陵西中一年 二関 璃 桜椰

初旅に空のアーートの雲景色

陵西中二年 鴨田 龍 之介

空白の夏休み中の予定表

陵西中二年 渡邊 珠希

音楽室若葉の音色吹奏楽

陵西中二年 阿部 剛馬

初場所の両国に響く太鼓の音

陵西中三年 駒林 航成

しなり耐え獲物躍らす夏の竿

陵西中三年 新宮 羽優真

吐いた息見上げた先には冬銀河

陵西中三年 榎津 心結

春疾風声援とともに背中押す

陵西中三年 大泉 健

朝日浴び線路の光る余寒かな

北海道函館ラ・サール中一年 棟方 啓行

春風がそつとほっぺにふれていく

岐阜県美濃加茂市立東中一年 仲井 紗衣

スイーツに美を追加するさくらんぼ

岐阜県美濃加茂市立東中一年 渡邊 瑞稀

私たち二人で一つさくらんぼ

岐阜県美濃加茂市立東中一年 福井 晴翔

木曾川が流れ輝く夏の日々

岐阜県美濃加茂市立東中一年 上田 勘太

庭の外宿題やれよとキジが鳴く

岐阜県美濃加茂市立東中一年 浅野 寛介

さくらんぼヨーグルトの上トッピング

岐阜県美濃加茂市立東中一年 山田 俊

春一番父と出かける映画館

福岡県春日市立春日中一年 谷本 陽

たいように両手伸ばしてさくらんぼ

福岡県春日市立春日中二年 山口 翔太

どこまでも進んでゆくぞ蝸牛

鹿児島県長島町立鷹巣中一年 馬場 朝日

さくらんぼ双つ寄り添い支え合う

鹿児島県長島町立鷹巣中二年 北村 治大

さくらんぼプリンの上に乗っている

鹿児島県長島町立鷹巣中二年 柏木 龍王

弁当にいつもいるのはさくらんぼ

鹿児島県長島町立鷹巣中二年 田中 優利愛

部活終わり麦茶一口世界一

鹿児島県長島町立鷹巣中三年 山上 雄世

## 高校生の部

### 武田菜美選

#### 特選

行く春の象を素通りできざるる

愛知県名古屋高校三年 関谷諒太

#### 秀逸

夏隣どかつと座りたる男

山形県山形東高校三年 菅野桃花

雑音の愉快なラジオ梅雨鮎

愛知県名古屋高校二年 武田直弥

#### 選評

武田菜美

特選 行く春の象を素通りできざるる

関谷諒太

「行く春」即ち移ろう時間が、象という灰色の巨体に出交して立ち止まっている、否、次なる夏へワープできずにいると読みました。そして「象」は少年期に別れを告げて大人になってゆく前の不安のように思われました。

川本皓嗣著『日本詩歌の伝統―七と五の詩学―』の一節。俳句は十七音のなかに必要な一切をおさめ、その叙述やイメージに触発された読み手の連想や推理に、多くを依存する詩のジャンルである。にびつたりの秀句です。

秀逸 夏隣どかつと座りたる男

菅野桃花

佐保姫の掌る春もいよいよ終りを迎える頃には、木々の緑も日毎に色濃くなり、炎帝の掌る夏へと姿を変えてゆきます。翾やかさから強力さへと移りゆく風景を、どっかりと腰をおろした男性の姿と把握したところに力量が感じられます。

秀逸 雑音の愉快なラジオ梅雨鮎

武田直弥

かつてのラジオに雑音は付き物でした。楽しみにしていたメモデューを雑音に消されて残念な思いをすることもよくありましたが、現代のラジオは優秀ですので、雑音とは、例えばトーク番組の中の不用意な発言のようなものかもしれません。そして発言の主はといえば、池の底で主顔をしている大鮎に違いないと断じたユーモアに心引かれました。

近詠 コンクリートジャングルに雨みどりの日

佳作

夕焼けと遅れるバスを待っている  
山形県左沢高校二年 齋藤 彩

似顔絵に黒子くつきり風光る  
愛知県名古屋高校二年 近藤 理仁

さくらんぼ顔のぞきこみ話す癖  
宮崎県尚学館高等部三年 帯谷 到子

入選

春風や髪をほどけば空ひらく  
山形県左沢高校一年 石山 ひまり

薄紅の空に溶けゆく桜かな  
山形県谷地高校二年 後藤 杏

花筏追えば追うほど遠き日々  
山形県谷地高校三年 佐藤 唯愛

金魚鉢消灯のあと光り出す  
山形県谷地高校三年 吉田 櫻子

春の雨田んぼの土の匂い立つ  
山形県谷地高校三年 佐藤 心春

カレンダーめくり忘れて青嵐  
愛知県名古屋高校一年 皆川 弘毅

自転車の熱きサドルや水旗  
愛知県名古屋高校一年 川西 倅太郎

合歓の花蛇口がたくなつている  
愛知県名古屋高校一年 山本 理仁

桜桃や放課後だけの風がある  
愛知県名古屋高校二年 芦沢 駿

土佐水木パン屋は袖をぐんと上げ  
愛知県名古屋高校三年 東野 礼豊

コウモリや記念誌めくる音がする  
愛知県豊橋西高校二年 森谷 泉美

うぐいすや庭の余白に声ひとつ  
愛知県豊橋西高校二年 神谷 莉央

さくらんぼ風に揺られて一人つ子  
愛知県豊野高校二年 田間 美紅

さくらんぼ最後の楽しみきょうだいに  
奈良県奈良大学附属高校二年 森 拓也

夏近し巨大カートに夢つめて  
広島県広島修道大学ひろしま協和高校三年 荒谷 美咲

## 選者略歴

### 岸本尚毅 先生

1961年岡山県生まれ。

俳誌「天為」「秀」同人。

編著書に『文豪と俳句』『室生犀星

俳句集』『新編虚子自伝』『露月百句』

など。

俳人協会理事、岩手日報・山陽新聞

選者。

角川俳句賞選考委員。2025年度

「NHK俳句」選者。

### 松田弘三 先生

寒河江市生まれ

俳誌「森の座」無鑑査同人

「青瓢俳句会」共同代表

公益社団法人俳人協会々々員

山形県俳人協会々々員

### 阿部栄子 先生

「詩音俳句会」会員

### 武田詩子 先生

俳誌「森の座」同人

「青瓢俳句会」幹事

「詩音俳句会」代表

公益社団法人俳人協会々々員

山形県俳人協会々々員

### 佐々木龍雄 先生

俳誌「森の座」同人

公益社団法人俳人協会々々員

「青瓢俳句会」共同代表

山形県俳人協会々々員

### 加藤 仁 先生

俳誌「森の座」無鑑査同人

公益社団法人俳人協会々々員

「青瓢俳句会」代表

山形県俳人協会々々員

### 武田菜美 先生

俳誌「銀化」同人

「山寺俳句塾」代表

「赤とんぼ」俳句会々々員

公益社団法人俳人協会々々員

山形県俳人協会常任幹事

学校法人NHK学園俳句部門講師

句集「梨の芯」

## 応募句数 四、一七八句

小学生の部 一、七四五句

中学生の部 一、〇五三句

高校生の部 五〇六句

一般の部 八七四句

第五十五回 さくらんぼの都市さがえ

全国俳句大会

第四十六回 さくらんぼの都市さがえ

全国小・中学生俳句大会

千九九一—〇〇二一

山形県寒河江市中央一丁目七番十四号

寒河江市立図書館内

さくらんぼの都市さがえ

全国俳句大会実行委員会事務局

TEL (〇三三七) 八六一—一六六二